

蚕糸功績賞

手塚 本衛

功績概要

上田信用金庫を退社後、平成8年6月に蚕種製造業事業者である上田蚕種協業組合に勤務し、平成10年3月に専務理事、平成12年10月に代表理事に就任した。平成15年11月には、同組合の株式会社への組織変更により、代表取締役役に就任した。この間、優良蚕種の製造と群馬、埼玉、山梨、長野各県等に対する蚕種の安定供給に努めた。

蚕種製造業は、養蚕農家の高齢化、後継者不足から蚕種製造販売数量の減少が続く中、蚕種製造関連業者の転・廃業が相次ぐ状況において、蚕種製造におけるコスト低減と経営の合理化を図り、養蚕農家がある限り蚕種製造を継続するとの強い意志と決意を持ち、蚕糸業の維持・発展に努めた。

また、各地の稚蚕共同飼育所が閉鎖を余儀なくされる状況のもと、蚕種の供給のみではなく、稚蚕を自社で飼育し、稚蚕の安定的な供給体制の確立にも取り組んできた。その結果、稚蚕は、長野県内だけではなく、岐阜県など他県への供給と全国各地の研究機関・研究者への提供を行ってきた。加えて、製菓会社等企業、小学校から大学までの教育機関、個人等蚕種提供の要請に応えるべく、社内の受発注体制を再編し、インターネット等を通じて体制の確立にも意を注いだ。

平成23年度からは、上田蚕種(株)として、「蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業」に参画し、自らが責任企業となった「上田蚕種の会」を組織し、原種繭生産の養蚕農家と結びつき優良蚕種の製造を行うとともに、他の蚕糸・絹業提携グループのニーズに合わせた多様な優良蚕種の提供に尽力している。

また、街に上田城内の「しだれ桑」を植栽する運動や蚕養国神社の保存・整備等「蚕都・上田」を象徴する景観と養蚕文化の維持にも尽力している。

このように日本蚕糸業の根幹をなす優良な蚕種及び稚蚕の安定供給並びに蚕種の技術発展と養蚕文化の維持に資した功績は大きいものである。

蚕糸功績賞

木下 幸太郎

功績概要

昭和40年白生地問屋の株式会社丸太柴田商店勤務、昭和62年には取締役商品部長に就任し、平成11年まで35年間勤務した。この間、14中糸やファインシルク等の新商品の開発に努め、絹織物業界の振興に尽力した。

また、平成11年には、株式会社丸太柴田商店を引継ぎ、株式会社マルシバを設立し、川上（蚕糸業）と川下（絹織物業等）をつなぐ事業展開を行い、平成18年には「プラチナボーイ」と「白繭細一号」の2蚕品種について、川上と川下が連携し、その特徴を活かした純国産絹製品づくりを進めた。これらの功績により、平成19年に「蚕糸功労賞」を受賞した。

平成20年2月から国の「蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業」が実施されたことに伴い、多くの蚕糸・絹業提携グループが設立された。

氏は自ら「“絹を未来に”プラチナボーイ研究会」と「白繭細一号プロジェクト開発チーム」の提携グループを主宰するとともに、我が国の絹産業の振興と絹文化の継承発展を図るため、「蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会」の設立に尽力し、その代表幹事に就任した。同協議会は、「宝絹展」の開催、大学等異分野との交流等、純国産絹製品のPRに積極的な活動を行い、川上から川下が提携し特徴ある純国産絹製品づくりを推進し、我が国蚕糸業の振興に多大な貢献を行った功績は大きいものである。